In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	アムステルダム・ノート
Author	大島, 真理夫
Citation	大阪市立大学史紀要. 2 巻, p.85-89.
Issue Date	2009-10
ISSN	1884-3522
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学史資料室
Description	
DOI	10.24544/ocu.20171208-083

Placed on: Osaka City University

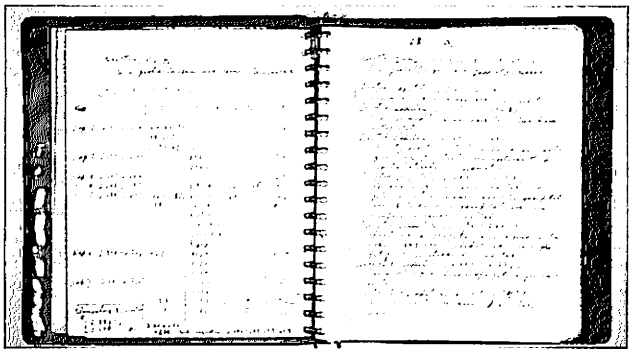
Osaka Metropolitan University

≪学術標本紹介≫

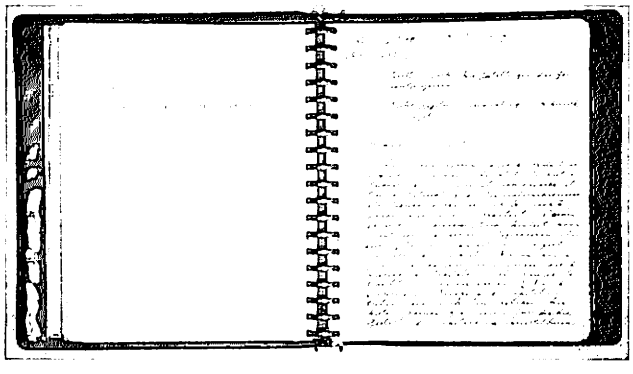
アムステルダム・ノート

大　島　真　理　夫[1]

「アムステルダム・ノート」とは、本学経済学部・経済学研究科に1952年から1976年まで在籍した故佐藤金三郎教授が、1969年12月から1970年3月にかけて、オランダ・アムステルダムにある社会史国際研究所を訪問し、同研究所が所蔵するマルクス・エンゲルス遺稿、とくに『資本論』関係の草稿の調査を行い、限られた滞在日数の中で、草稿の重要部分を写し取ったノートであり、関係者の間でこのように呼ばれている。写真1・2に見られるとおり、ビニール製表紙のルーズリーフノートである。300ページ以上に達する。



（写真1）草稿の全体構成をまとめた箇所



（写真2）草稿の第1章冒頭部の筆写箇所

(1)　第22回展示（第1期）での説明資料と佐藤金三郎「アムステルダムだより」（『思想』556号、1970年10月）を中心に、大島の責任で作成した。

佐藤金三郎は、1927年3月4日に東京に生まれ、東京商科大学を1951年3月に卒業した。卒業論文のタイトルは「利潤率の傾向的低落法則研究序論」（1951年3月）であった。短期間の会社勤務の後、1952年8月に、大阪市立大学経済学部助手となった。その後、同大学経済学部講師、助教授を経て、1970年4月に教授となった。大阪市立大学に就職後の最初の論文は、「『経済学批判』体系と『資本論』――『経済学批判綱要』を中心として」（『経済学雑誌』第31巻第5・6号、1954年12月）である。この論文は、日本における『経済学批判要綱』研究の先駆けとも言うべき力作であるというだけではなく、その後の日本における『資本論』成立史研究、とりわけいわゆる「プラン問題」研究をリードすることになる佐藤の出発点となる論文であった。この論文以後、佐藤は立て続けに、『資本論』成立史関係の多くの論文を発表していった。こうして、プラン問題(2)は佐藤のライフワークとなった。その後、1976年に横浜国立大学に転出し、同大学に在職中の1989年1月19日に死去した。

周知の通り、マルクスの主著『資本論』は、生前には第1部までしか刊行されず、第2部、第3部は、彼の死後、エンゲルスがマルクスの草稿を編集して刊行されたものである。したがって、『資本論』成立史の研究にとって、マルクスの草稿を検討することは、重要な意義をもつ課題であった。その草稿は、オランダのアムステルダムにある社会史国際研究所に所蔵されており、当時は未刊行であった。佐藤は、この調査を行うべく、研究所を訪問したのである。

社会史国際研究所（Internationaal Instituut voor Sociale Geschiedenis―略称IISG）は、1935年に設立された社会史と労働運動史の資料収集と研究のための世界最大の研究所である。研究所に収集されたコレクションは、その大部分が一般に公開されている。佐藤が調査対象としたマルクス・エンゲルスの遺稿は、当初ドイツ社会民主党によって保管されていたが、1933年にナチスが台頭したとき難を逃れるため、保管・売却先を巡る幾つかの紆余曲折を経て、あるいは散逸や紛失や盗難に逢いながら、最終的にIISGに売却され所蔵されることになったのである。

同研究所における佐藤の調査の様子は、帰国後、発表された、「アムステルダムだより――IISGとマルクス・エンゲルス遺稿をめぐって――」（『思想』556号、1970年10月）によって、詳しく知ることができる。これは、アムステルダム滞在中に、佐藤が、経済学説史研究者の杉原四郎（当時、甲南大学教授）に宛てて送った私信を発表したものであり、判読しがたい草稿との格闘の様子や、新発見に驚喜する様子が率直に叙述されており、感動的である。それによると、佐藤は、到着当初は、冬のアムステルダムの天候や、担当の研究者になかなか面会できなかったりで、調子が出なかったようであるが、それまで知られていなかった新しい『マルクス・

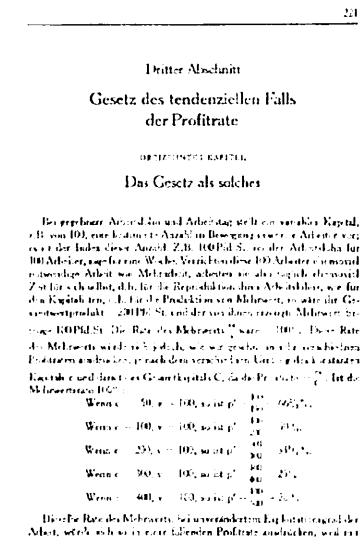
(2)「プラン問題」とは、カール・マルクスが本格的に経済学を研究し始めた1857-58年頃に構想した自著『経済学批判』体系の著述プランと、その後約10年を経て成立した『資本論』体系（第1巻＝1867年、第2巻＝1885年、第3巻＝1894年）との間に、基本的な計画変更が行われたかどうか、そして、もし当初の著述プランの変更が行われていないとすれば『資本論』は当初のプランのどの部分をカヴァーするのかという問題である。

エンゲルス遺稿目録』の所在を知り、ゼロックス・コピーが許されなかったため、それを借り出して『目録』の必要部分の筆写を始めた。10日近くかかったようであるが、資本論関係の草稿や抜粋ノートの所在を知り、興味をそそられたようである。その後、小休止の後、マルクスが第2版のために書き込みを行った『資本論』第1巻初版の手沢本と、『資本論』第3巻草稿のフォトコピーを借り出し、まず、第1巻手沢本の書き込みの判読に取り組んだ。第3巻の草稿は、「目下閲覧中ですが、ご存知の『象形文字的書体』(エンゲルス)、とてもではありませんが私の能力をこえて判読できず、絶望しています。なんとか勇気をふるいおこしてアタックしてみるつもりですが、はたしてどこまでやれるかどうかはかなはだ心許ないしだいです」(同誌、134ページ)と弱音をはいている。

初版本では、マルクスの書き込みが約160カ所にのぼり、中には第2版、現行版に取り入れられていないものもかなりあることに驚き、なぜ、マルクス自身の訂正がその後に反映されていないのか、と疑問を抱いている。マルクスの書き込みは、非常に小さな字で書かれ、1週間がかりで判読に成功すると言うような部分もあったようであるが、慣れるにしたがって、ずいぶん、読めるようになったと述べている。「何日もわからなかった一語がある日突然に解読できたということがしばしばで、その嬉しさは格別でした」(同誌、136ページ)と、率直に苦労と喜びを表現している。そして、作業に使っている、『資本論』初版本はマルクス自身の書き込みがあり、参照している第2版や英語版は、マルクスやエレノア・マルクス(マルクスの娘)とエンゲルスの献辞付きという、普通の図書館では触ることが許されないような貴重書を何冊も手元に置くという豪華さに「夢のような気がします」と喜んでいる。

初版本の調査後、佐藤は『資本論』第3巻の草稿に挑戦することにし、帰国の予定を1ヶ月延長した。長い間、係に預けっぱなしにしていた草稿を読んでみると、現行版のテキストを頼りにすれば、決して読めないことはないということに気づき、さらに読み始めてみると、現行版のテキストと同じという箇所は1つもないということに驚き、この草稿の重要性を悟ったためである。「以来、この一〇日間というものはIISGに九時半の開館と同時に飛び込み、五時の閉館まで、ときには昼食を抜いてそれこそ最後のアガキとばかりに必死になってがんばったのですが、やはり一〇日間ではとても無理」であったため、予定を変更したのであった。「毎日毎日調べるたびごとに、私にとっては意想外の新事実をつぎつぎに発見し、この草稿が『資本論』成立過程の研究に不可欠の重要文献であることを痛感するにおよんで、さんざん迷いましたが、とうとう最後のどたん場で肚をきめ、帰国をひと月延期することを決意したしだいです。なにしろ相手が名にしおう難物—「七つの封印をもった書物」(エンゲルス)—ですから、たといひと月延期したところではたしてどれだけやれるかはなはだ疑問ですが、ともかく全力をつくして調べてみるつもりです」(同誌137～138ページ)というように興奮を隠していない。

こうして、佐藤は必死になって草稿を読み、現行版その他と対照し、ひたすらノートを取っていった。「この草稿をもとにいろいろな問題を調べているので、テキストのノートはなかなか進行しませんが、それでもこれまでにかなりの箇所をノートすることができました。もちろ



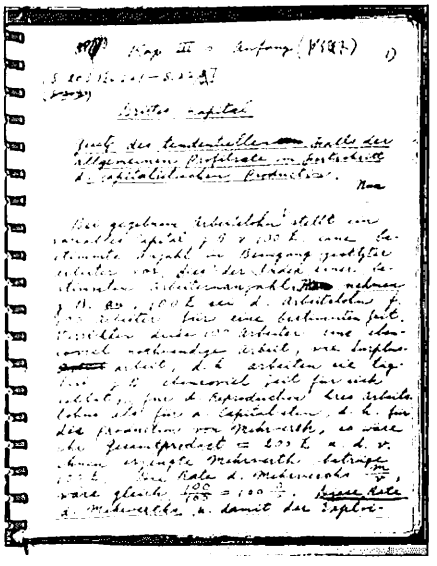
Dritter Abschnitt

Gesetz des tendenziellen Falls der Profitrate

DREIZEHNTES KAPITEL

Das Gesetz als solches

（写真３）WERKE 版の第３巻第 13 章冒頭ページ



（写真４）ノートの該当箇所

ん、どうしても読めないところがいくつもあって、私のノートはまるで「虫喰」だらけですが、各章の書きだしはプラン問題にとって重要なので、第七章をのぞいて全部ノートしました。いずれも多かれすくなかれ違いますが、なかでも現行版第一三章の利潤率低下論のところの書きだしがまるでメチャクチャに違います。まったく驚くばかりです」（同誌 141 ページ）と述べている（写真３・４参照）。

結論として、「ともかく、われわれは、いや、すくなくとも私は、現行版『資本論』第三巻の表紙に明記されている「フリードリッヒ・エンゲルス編集」の文字をこれまであまりにも軽くみすぎていた、あるいは無視していたのではないか？　現行版『資本論』第三巻（および、おそらく第二巻も）は厳密にいえばマルクスの著作ではない。それは、すでにレーニンがいみじくもいいあてていたように、文字どおりマルクスとエンゲルスの共同労作である、というのがこれまで第三巻の草稿をみてきたかぎりでの私の到達した結論です」とショックを表現した。そして、「目下の心配は（？）は、帰国後、日本の学界が草稿について私の報告を信用してくれないのではないか（？！）ということです。帰国後、お目にかかれる日を楽しみに」（同誌、同上ページ）と結んでいる。私事であるが、帰国後の佐藤の講義に出席した筆者などは、アムステルダムでの調査の興奮を語った佐藤の口調を今でも記憶している。学生の間でも、ちょっとしたセンセーションを巻き起こしたものであった。

佐藤の調査結果は、帰国後、多くの引用を行った「アムステルダムだより――IISG とマルクス・エンゲルス遺稿をめぐって――」（『思想』556 号、1970 年 10 月）と、より内容に立ち入った論稿である「『資本論』第三部原稿について（1）（2）（3）」（『思想』562 号、564 号、580 号、1971 年 4 月、6 月、1972 年 10 月）等において詳しく報告された。

佐藤の調査によって、マルクスの草稿とエンゲルス編集の現行版との異同が初めて明らかに

された。これは、当時の『資本論』理解に変更を迫る部分があり、学界に大きな衝撃を与えた。その後、これらの草稿は活字化されて出版され(3)、一般に利用しやすくなった。加えて、マルクス経済学の評価が簡単ではない今日において、このノートのような仕事の意義は決して自明ではない。しかし、佐藤の研究対象への飽くことなき没入の姿勢は、時代を超えて学問研究に携わる者の心構えを教えていると言えるであろう。

本ノートは故佐藤教授のご遺族が所蔵しており、今回はそのご厚意により、大学史資料室の第22回展示（第1期2009年2月～7月）に出展した。また、解説文の作成を始め、展示の全般について、桃山学院大学松尾純教授のご援助を得たことを記し、感謝の意を表したい。本稿も松尾氏作成の資料に多くを負っている。

（おおしま　まりお・大学史資料室長）

(3) *Ökonomische Manuskripte 1863-1867*, in *Karl Marx, Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA)*, Abt. II, Bd. 4, Teil 2, Dietz Verlag, 1992.